

福沢諭吉とナショナルリズム

青山 永 久

この巻は大きく三部に分かれている。「Ⅰ 福沢諭吉」「Ⅱ ナショナルリズムの特質」「Ⅲ 民族と人民」の三つである。各部に収録されている論文の執筆年代は五〇年代の初めから九〇年代まで四〇年近くに渡っている。当然その間に著者の考えかたの変化もあるわけであるが、その変化をあとづけるよりも、それらに一貫していると思われる遠山の考え方について述べていきたい。

まず福沢諭吉に関する論考であるが、遠山は福沢を、その二面性からとらえようとしていると思われる。遠山が福沢について高く評価するのは、その「在野精神」である。「官民調和論」が福沢の思想を通ずる特色であるとされているが、その根底には在野精神確立の願いがあったというのである。つまり彼の「官民調和」とは、民の自主的な立場を堅持した上での官への協力であって、仲間になることではないというのである。

また遠山は、福沢が原理原則をもった思想家であることを強調する。福沢の主張はみたところくると変わって一貫性がないようだが、決してそうではなく、「常に具体的に時々刻々の現実の提起する課題にたいして、彼の原理原則にもとづいて、時に随機にに応じて回答することによって、自己の思想を提示」した。そして根底にあるのは上からの開明化の強制を下からの開明化の自主に切り替えるという志ではなかったかというのである。

「一身独立して一国独立する事」、これこそ福沢が本来めざした事であって、その目的の範囲内で、個々具体的には融通をきかすことができた、といっているように思える。

だが、もちろん遠山は福沢の思想に問題がなかったとはとらえて

いない。前述のように個人の独立と同時に国家の独立、国権の伸張を福沢は期待しており、その両者の緊張関係、均衡が保たれているところに、彼の思想家としての真骨頂がある。ところがそのバランスが崩れて、民権の伸張こそ国権拡張の基礎であり、前提であるとするのではなく、民権を押しやるために国権の高唱がされ、日清戦争を野蛮に対する文明の義戦として、「脱亜入欧」を叫ぶまでになつてしまった、と捉えている。

このように遠山は福沢の二面性を指摘しつつ、かなり高い評価をしているのがわかる。では果たしてこのような遠山の福沢評価は妥当なものだろうか。福沢の専門家ではないわたしにはそれを語ることはできない。ただいくつもの遠山の論考を読んで感じたことは、氏自身の心の揺れを反映してか明確さを、たとえば丸山真男の論考と比べた場合、欠いているように思われた。自由民権運動を基本的に高く評価する遠山は、運動の高揚にたじろいで、それを「駄民権論」とまで罵る福沢をどう評価しているのか戸惑っているかのようである。丸山が、福沢は社会的価値が政治権力に集中する伝統的傾向を排除しようとする志向を持ち、自由民権運動も社会的価値の分散の一つのケースとして、そのかぎりにおいて支持したのだと明快に述べているのとは対象的である。

次にⅡのナショナルリズムの特質についてのべていきたい。

ⅡもⅠと同じようにいくつもの論文からなっているが、特に一六の「二つのナショナルリズムの対抗」、一七の「日本のナショナルリズム」の二編を中心に紹介・評価していきたい。

「二つのナショナルリズムの対抗」のなかで遠山は次のように主張

する。「本来、ナショナリズムそのものだけでなく、革命的なものでなければ、反革命的なものでもない。それぞれの時点において、ナショナリズムは、具体的にどのような階級的政治主張を内容としているか、またいかなる階級的政治勢力によって指導されて政治的課題たらしめられているか、その条件にしたがって、革命への巨大なエネルギーの給源ともなれば、その逆に反革命の堅固な防塞ともなりうるのである。」

つまり遠山は、進歩的ナショナリズムと反動的ナショナリズムとの対抗が、基本的な政治的対立の線に沿って存在することを強調する。ナショナリズムは、近代市民革命において成立する。そして自主的に市民革命が行なわれた西欧の先進資本主義国の場合、国民国家形成というナショナリズムの問題は、封建的抑圧からの国民の解放というかたちで解決された。これに対して後進国の場合、ナショナリズムとは外からの近代化の強制に対する民族闘争というかたちをまずとらざるをえなかった。日本の場合、それは封建的土地所有者の、封建支配を守るための「攘夷運動」として起こされたが、根の浅いものに終わり、やがて封建支配者は攘夷を倒幕に転じ、明治維新を実現した。そこが大規模な排外運動が起こった中国との違いであることを遠山は指摘する。したがって日本の場合ナショナリズムはいかに国権を強化するかという観点から叫ばれようになった。つまり上からの近代化の実現手段としてのナショナリズム、上からのナショナリズムから始まったというわけである。それに対して自由民権運動は下からのナショナリズムであり下からの近代化をめざしたものであると評価される。

遠山は進歩的ナショナリズムと反動的ナショナリズム、下からのナショナリズムと上からのナショナリズムを対比させているが、四つの互いの関係については不明確であると思われる。そもそもナショナリズムとはなにかという最も根本的なことがきちんと定義されていないことがなにか遠山の議論をわかりにくくしていると思われる。

遠山は盛んに下からの近代化やナショナリズム、革命を言う。明らかにそこには下からの運動、下からの思想こそがすぐれており、ほんものだという価値判断が働いているように思える。だが本当にそうなのだろうか。またそもそもそれが可能なのかということも問われなくてはならないだろう。下からの近代化は、例えば最初に産業革命が起こったイギリスにおいてははいえるかもしれないが、それ以外の国々においては多かれ少なかれ上からの近代化のかたちをとらざるを得ないのではないかと思われる。下からのナショナリズムについていうならば、それは本質的にあり得ないのではないかと思われる。なぜならば、狭い地域社会に安住している一般民衆が強い国家意識を自然にもつようになることはとても思えないからである。ナショナリズムは、近代国家を建設する過程において、教育やマス・メディアを通して強力に民衆に植え付けられるものではないだろうか。かつて植民地であったアジアやアフリカの国々を見てもそれは明瞭であると思われる。